

— 告 白 —

KIT
キャンパス
レポート
文・杉村裕之



桑野 彩音 (くわの あやね)
金沢工業大学大学院工学研究科
バイオ・化学専攻
博士前期課程二年
石川県 小松市立高等学校出身

華奢な身体に強靱な意志 「一隅を照らす」で歩む

華奢な身体のどこに強靱な意志が秘められているのかと思った。桑野さんは二〇二三年春、KITを卒業し、医療機器を販売する会社に就職した。営業成績はよく、社会人の階段を順調に上り始めた。上司には見えたに違いない。しかし、本人は「このままでいいのか。学生時代、あれほど楽しいと思っていた研究でやり残したことはないのか」と自らに問いかけていた。

変形性膝関節症の治療に役立てる新たな培養方法に取り組み、毎日のように研究所に通った。「全く知識のなかった遺伝子の初歩から丁寧に教えていただき、感謝の言葉しかありません。KITで指導を受ける谷田育宏先生からは、工学や化学の知識と視点を研究に活かすアドバイスをもらっています」

現在、肺がん幹細胞を標的とした新しい抗がん剤の開発に挑む。再発や転移リスクの高い肺がんを治すカギは、がん幹細胞をいかに封じ込めるかにある。桑野さんは、がん幹細胞を活性化させる遺伝子と、その機能を阻害する化合物を突き止めようと、さまざまなアプローチから実験を重ねる。

今年四月、がんに関する研究を扱う査読付きの国際学術雑誌に成果が掲載された。彼女も執筆者の一人に名を連ね、「次の論文発表でも貢献できるよう頑張る」と話す。

えくぼの出る笑顔がいい。日々の充実感を何よりも物語っている。就職は、越中売薬で知られる富山県の製薬メーカーから内々定をもらった。医薬品の元となる原薬や中間体の開発、製造を専門にしており、「がん征服につながる薬を世の中に送り出したい」と、己の歩む道をしっかりと見定める。

声はやや小さいが、自分に正直に生きる決意が伝わり、私の頭の中で「一隅を照らす」の言葉と重なった。最澄の説いた「与えられた場所で全力を出し切り、必要とされる人間にならなさい」を実践する若者がここにいるからだ。

そんな人材こそ、『これ即ち国の宝』と最澄は続ける。桑野さんみたいな学生を育てる教育が、混迷を深める二十一世紀に求められるのではないだろうか。

金沢工業大学
石川県野々市市扇が丘七二
電話番号(〇七六)二四八二一〇〇